

平安後半期の真言宗における経の訓読と儀軌の訓読

松 本 光 隆

目次

はじめに

- 一、考察対象言語集団と考察対象資料
- 二、経と儀軌における同文的訓読
- 三、経の訓読における注釈態度と儀軌の訓読における注釈態度
- 四、経の訓読と儀軌の訓読における読添語の様相
- 五、経と儀軌との漢文体の相違と読添語の量的相違との相関関係
- 六、経の訓読語と儀軌の訓読語の質的相違
おわりに

はじめに

平安鎌倉時代の訓点資料の漢文訓読語史について、近時、同一典籍の同文的比較研究によって、位相差、即ち、言語集団の相違による訓読語の違いの解明が進んでいる。小林芳規博士は、「平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究」において、平安鎌倉時代の俗家である博士家の訓点資料を博搜し

平安後半期の真言宗における経の訓読と儀軌の訓読

て、各博士家によって、訓読語の性格が異なることを論じられた。以後、三保忠夫氏、築島裕博士、小林芳規博士等は漢籍のみでなく、仏書の訓点資料にも同様に言語集団の違いによる訓読語の差異の存することを指摘され、宗派流派、即ち、天台宗寺門派・山門派、真言宗小野流・広沢流それぞれの訓読語が異なる性格を有することを指摘された。⁽¹⁾ 月本雅幸氏は、同様の宗派流派による訓読語の異同があることを指摘される一方で、訓読されたある書物たとえば、大唐西域記などが、その書物の性格によって、宗派流派によっても訓読語の差違を示さないものがあることを指摘された。⁽²⁾

これらの先学の研究は、言語集団の違いという視点から、訓読語の相違を明らかにしようとされたものであつて、一言語集団内部の多数の訓点資料が、均一の訓読語を反映したものが否かの検討は顧みられることが少なかったように思われる。

本稿は、かかる先学の研究に導かれながら、以下のことを考えようとするものである。第一点は、一言語集団の内部において、訓読される漢文の性格によって訓読文体の差違が存していたこと。

第二点は、各言語集団間において、その差違の様相が異なっていること。

以上の二点を、本稿の中心課題とし、特に、儀軌・次第類の訓読語の性格を共時的に俯瞰し考えてみようとするものである。なお、平安時代加 points の訓点資料の遺存量は、膨大なものに上るものである。本稿はその一部の資料を取り上げたにすぎないもので、見通しを示すものであることを最初にお断りしておきたい。

一、考察対象言語集団と考察対象資料

本稿に考察対象とする言語集団は、平安時代後半期、すなわち平安後期、院政期（十一・十二世紀）

の真言宗である。真言宗の訓点資料は、平安後半期において、それ以前に比べ多様な様相を示すものと捉えられる。真言宗広沢流においては、主として円堂点・浄光房点や広隆寺点等のヲコト点を使用した訓点資料が残されているが、このうち、広隆寺点資料の遺存は、その資料の量が極めて限られたもので、高山寺蔵の大集虚空蔵菩薩所問經嘉承元年丹波雅康点が知られるばかりであり、浄光房点の資料の遺存量も、決して多いものではない。

真言宗小野流に属する訓点資料は、主として東大寺点・喜多院点等のヲコト点を使用した資料が残されているが、東大寺点・喜多院点ともに本来は南都に端を発するヲコト点法であって、特に、平安後半期に、真言宗小野流において多用されたヲコト点である。そのうち、喜多院点は平安時代も前半期は興福寺など南都法相宗で使用されていたヲコト点法であるが、平安後半期、中川上人實範以後、實範ゆかりの大和中川成身院・山城光明山・高野別所などでの使用資料が残されているが、實範以前の真言宗での使用例は多くはなく、真言宗小野流も専ら中川流の中で使用されたもので、その資料の遺存量は、高山寺に玄證の関わった成身院本が比較的まとまって伝存しているもの、円堂点資料や、東大寺点資料などに比べて決して多いものではない。真言宗高野山に関する訓点資料では、高野山中院流の所用になる中院僧正点資料が存する。

以上の平安後半期の真言宗における訓点資料として、その資料の遺存量が多いものは、真言宗広沢流の仁和寺等を中心として使用されていた円堂点資料と、真言宗小野流の醍醐寺・勸修寺や石山寺などで使用されていた東大寺点資料、高野山中院流の使った中院僧正点資料とである。この内、本稿では円堂点と東大寺点の資料群を対象として検討を加えることとする。なお、本稿に考察の対象とした訓点資料は、以下の通りである。

円堂点資料

《経類》

◎円経 1 諸佛境界攝眞實経卷上・中・下嘉承二年点 三帖 高山寺藏第一一五函第八四号

[1] 卷上

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)五月二日酉時許於静定房以御本書了／一交了

(朱書)

「以同御本移點了□□□／同年四月十九日以樂成房経御房奉受了」／僧林寛之本

[2] 卷中

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)四月廿五日於静定房□了／一交了

(朱書)

「以御房本移點了□□□／同年同月廿日御房奉受了」僧林寛之本

[3] 卷下 奥書ナシ

◎円経 2 金剛頂瑜伽中略出念誦経卷第一一四嘉承三年点 四帖 高山寺藏 重文第二部四七号

[1] 卷第一

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)十月二日「御」房以本書了交了

(朱書)

「同三年正月廿二日以同本移點了」

(墨書別筆)

「天仁二年(一一〇九)五月十二日於／瀧尾山御房奉受了」

(墨書又別筆)

「僧林寛之本」

[2] 卷第二

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)十月廿五日於御房以御同本書了／交了

〔朱書〕「同三年正月廿五日以同本移點了」

〔墨書別筆〕「僧林寛之本」

〔墨書又別筆〕「天仁二年（一一〇九）五月十三日於瀧尾奉受了」

〔3〕 卷第三

〔奥書〕嘉承二年（一一〇七）十月廿一日於靜定房□□□以御本書了

〔追筆〕「一交了」〔朱書〕「以同本同三年正月十七日移點了」

〔別筆〕「天仁二年（一一〇九）五月廿四日於瀧尾御房奉受了」

〔朱書別筆〕「林寛之本」

〔4〕 卷第四

〔奥書〕嘉承二年（一一〇七）十月廿七日於御房以□本書了

〔朱書〕「同三年二月四日以書本移點了」

〔墨書別筆〕「天仁二年（一一〇九）五月廿五日於瀧尾御房奉受了」

〔又別筆〕「僧林寛之本」

〔又々別筆〕「保延三年（一一三七）十月十日為故御房奉供養了導師勝定房阿闍梨」

◎ 円経 3 使咒法経院政初期点 一帖 高山寺藏 第六二函九〇号

〔奥書〕僧林寛之／〔別筆〕「奉受了」

◎ 円経 4 大毘盧遮那成佛神變加持経卷第一久安四年点 一卷（八卷の内） 仁和寺藏 靈七函

平安後半期の真言宗における経の訓読と儀軌の訓読

(與書) 久安四禾(一一四八)七月廿七日於高野奉受了

◎円経5 大毘盧遮那成仏経疏卷第二嘉保二年点 一帖(二十帖の内) 仁和寺藏

(卷一與書) (朱書) 「寛治七年(一〇九三)十月廿三日於高野奥院東菴室大僧都奉受了」

(卷第廿與書) (朱書) 「嘉保二年(一〇九五)二月廿日於金剛峰寺奥院東菴室觀音院／大僧都奉受了」

《儀軌類》

◎円儀1 毘盧遮那佛説金剛頂経光明真言儀軌永久三年点 一帖 高山寺藏 重文第一部六七号

(與書) (朱書) 「永久三年(一一一五)七月廿三日於高野御／山解脱房阿闍梨奉受了／僧林寛之本」

三校了

(別筆) 「久安五年(一一四九)四月十四日衆生房奉受了／ 僧弁眞」

◎円儀2 佛説七俱 佛母准泥大明陀羅尼念誦法門嘉承二年点 一帖 高山寺藏 重文第一部七五号

(與書) 一交了

(追筆) 「康和二年(一一〇〇)正月十日於帶口町壇所書了／ 如意輪法」

(朱書) 「喜承二年(一一〇七)二月廿六日於御房以御本移／點了／ 僧林寛之本」

(別筆) 「同三年四月五日御房奉受了」

◎円儀3 降伏三世益怒王念誦儀軌嘉承元年点 一帖 高山寺藏 第一部第四六号

(奥書) 嘉承元年(一一〇六)五月十四日未時於靜定房書了 / 僧林寛之本也

(朱書) 「同日以御房御本一交同移點了降伏三世益怒王念諦儀軌一帖同二年二月二日受奉了」

◎ 円儀 4 金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌嘉承二年点 一帖 高山寺藏 第六二函第
八一号

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)四月六日於御房書了 / 僧林寛之本

(朱書) 「以御房 / 本移點了」 (「於御房書了」ノ直後二續ケテ記セリ)

(朱書追筆) 「同月同日御房受奉了」

(別筆) 「久安五年(一一四九)正月廿八日巳剋許樂生房 / 奉受了 / 僧弁眞」

◎ 円儀 5 大虚空藏菩薩念誦法嘉承二年点 一帖 高山寺藏 重文第三部第七五号

(奥書) 嘉承二年(一一〇七)八月十三日於靜定房以同御本書了

(朱書) 「同日以同本移點了」 同年九月 / 一日御房受奉了 僧林寛之本

(別筆) 「奉受了」

◎ 円儀 6 慈氏菩薩略修愈 法卷上天仁元年点 一帖 高山寺藏 重文第一部第四四号

(奥書) 嘉承三年三月一日於靜定房書了(追筆) 「一交了」

(朱書) 「以同御本移點了」

(別筆) 「天仁元年(一一〇八)九月十八日御房 / 奉受了 □□□□□□僧林寛之本」

◎円儀7 金剛壽命陀羅尼經法天永二年点 一帖 高山寺藏 重文第一部第一八号

(奥書) 天永元年十一月十七日申時許於御房以同御本書了

(朱書) 「同二年三月八日丑時許以御本移點了」僧林寬之本

(追筆) 「同二年九月十九日於瀧尾護广堂午時許御房奉受了」

(別筆) 「久安五年(一一四九)四月二日巳時許樂生房奉受了」

◎円儀8 聖不動尊安鎮家國等法天永三年点 一帖 高山寺藏 重文第三部第八八号

(奥書) 天永三年(一一一二)三月十九日申時許於御房以同御本書了

(朱書) 「同年同月廿七日巳時許以同御本移點了」

(追筆) 「一交了」(又追筆) 「同年四月卅日辰/時許於仁和寺御房降雨徒然之間傳受了/

僧林寬之本」

◎円儀9 北斗七星護摩秘要儀軌嘉承二年点 一帖 高山寺藏 第一一五函第八三号

(奥書) (朱書) 「上□方奉受了」

(朱書) 「嘉承二年(一一〇七)二月十三日於靜定房以御本移點了/同日御房受奉了」/一交了

(別筆) 「僧林寬之本」

(又別筆) 「久安五年(一一四九)二月廿一日辰時許樂生房奉受了/僧弁眞」

◎ 円儀 10 観自在如意輪菩薩瑜伽法要院政期点 一帖 高山寺蔵 第一八三函第四六号

(奥書) □□□年七月廿八日書了東寺末(朱書)「學金剛/弟子林寛之本」(「覺印之本」擦消)

於高野御山傳受了/奉受了弁眞/北御房奉受了

(朱書) (擦消)

於□□王院奉□□□

◎ 円儀 11 降三世儀軌嘉承三年点 一帖 東寺観智院蔵 第一三一函第七号

(奥書) (朱書) 「嘉承三」(一一〇八) 二月十四日於金剛峰寺成蓮房奉受了」

(別筆) 「延享三丙寅歲(一七四六) 七月五日修飾了/僧正賢賀^生六十三^年」

◎ 円儀 12 金剛頂一字頂輪王瑜伽念誦次第院政期点 一帖 高山寺蔵 重文第一部第一七七号

(奥書) 天永二年(一一一一) 二月廿一日午時許於靜定房以/同御本書了/僧林寛之本

(別筆) 「久安五年(一一四九) 三月五日樂生房奉受了」

◎ 円儀 13 金剛界次第嘉応頃点 一卷 仁和寺蔵 塔二十七函

(奥書) 嘉广三年(一一七一) 歲次三月十四日未尅許書了(行頭ニ庵点アリ)

東大寺点資料

《経類》

◎ 東経 1 菡摩呼童子請問經承曆三年点 二帖 仁和寺蔵 靈三函(「訓点語と訓点資料」第九五輯、平成七年三月)

平安後半期の真言宗における經の訓読と儀軌の訓読

(上卷奥書) (追筆) 「一校了」

承 歴^(P.1) 二年(一〇七八) 四月八日於西房書了

(下卷奥書) (朱書) 「承 歴^(P.1) 三年三月一日於大谷阿闍梨御房奉受了」

◎東経2 大乘理趣六波羅蜜経(序文) 永保三年点 一卷 東京大学資料編纂所蔵 (「東大資料編纂所

本大乘理趣六波羅蜜経古点 翻刻と訳文(上)」岡崎和夫 「訓点語と訓点資料」第七三輯)

(奥書) 永保三年(一〇八三) 七月十日伊勢國鈴鹿郡大田／御庄／移點已了奉持沙門^(P.1) 本／

耳／龍徳房傳

◎東経3 蕪悉地羯羅経卷中院政初期点 一卷 広島大学蔵、奥書ナシ

◎東経4 不空罽索神呪心経仁平元年点 一卷 東京大学国語研究室蔵

(奥書) 承徳三年(一〇九九) 南呂月八日 戊寅 一日之内書／寫供養

(朱書) 「仁平元年(一一五一) 七月二十日以大法房本移點了興然」

◎東経5 蕪摩呼童子請問経卷上平治元年 一卷 石山寺蔵 校倉第一三函第二八号

(奥書) (朱書) 「平治元年(一一五九) 九月十六日於勸修寺西明院以證本兩度比校移點了／未學沙

門朗寵」

(別筆) 「治承四本(一一八〇) 五月十六日傳受了範賢生 十七歳」

◎東経 6 略出念誦経卷第三院政期点 一卷 広島大学蔵、奥書ナシ

◎東経 7 大毘盧遮那成仏経疏卷第十四久寿三年点 一帖 石山寺蔵 校倉第一〇函第八号
(奥書) 久寿三年(一一五六)四月十一日於勸修寺本堂後戸書寫了

◎東経 8 大毘盧遮那成仏経疏卷第三治承五年点 一帖 随心院蔵 第二函第一号 (「随心院聖教類の研究」(汲古書院)平成七年五月)

(奥書) 寫本日記云/永久二年(一一一四)秋參籠高野奥院之間集諸本校點了/同六年仲春十六日酉尅於勸修寺草庵以疏多本/并兩本義釋等往々添削訛謬交點等了(以上本奥書)
治承五年(一一八一)六月廿七日於東山草庵一兩度複了/二度校了 覺禪

《儀軌類》

◎東儀 1 金剛頂蓮華部心念誦儀軌寛仁四年点 一卷 石山寺蔵 校倉第一二函第四号

(奥書) (朱書) 「寛仁四年(一〇二〇)閏十二月一日於上醍醐寺傳法已了僧深觀/師前座主御房」

◎東儀 2 大毘盧遮那経広大成就儀軌永久三年点 二帖 高山寺蔵 重文第三部第四〇号

(卷上奥書) (追筆) 「同四月廿八日始書之」

永久三年(一一一五)乙五月一日書了 禪明寺^禪廊^禪之

(別筆) 「保延二年(一一三六)三月廿三日□□□奉受了」

◎東儀3 胎藏儀軌卷中(青龍寺儀軌)天永二年点 一帖(中下二帖の内) 東寺觀智院藏 第一三四函第一号

(奥書) 嘉承三年(一一〇八)八月十日酉時書了/小野大乘院之内小御堂書之

(朱書) 「元永二年(一一一八)十月廿日申時以松本御本點了」

(別筆) 「天養元年(一一四四)八月三日於金剛峰寺奉受円如房了/求法沙門顯嚴/同學仁

和寺中納言内供阿闍梨」

◎東儀4 金剛頂蓮華部心念誦儀軌天養二年点 一帖 石山寺藏 校倉第一二函第一六号

(奥書) 一校了

(朱書) 「天養二年(一一四五)十一月十一日於燈下移點了/東寺末資淳觀」

◎東儀5 火伴供養儀軌永曆二年点 一帖 高山寺藏 重文一部第二一号

(奥書) 永曆二年(一一六一)八月十二日於勸修寺本堂 /末資範果

◎東儀6 大毘盧遮那經広大成就儀軌卷上(玄法寺儀軌)長寛二年点 一帖 東京大学国語研究室

(奥書) (朱書) 「長寛二年(一一六四)初冬廿八日於勸修寺西明院移點了/求法沙門朗澄」

◎東儀7 金剛頂瑜伽降三世成就極深密門院政期点 一帖 東寺觀智院藏 第一六七函第一〇号

(奥書) 教□房傳受了求法僧□□

◎東儀 8 金剛界略次第院政期点 一卷 石山寺藏 校倉第九函第一二号

(奥書) 延久三年(一一〇七一)三月廿六日書寫已了

(別筆) 「始同年五月九日至于十七日并六日於石山大門房□林闍梨御房習學了」

◎東儀 9 傳法灌頂作法永曆元年頃点 三卷 石山寺藏 校倉附一二号

(奥書) (朱書) 「本云天仁元年(一一一〇)十月廿七日以他本奉受先師上綱／此書是上綱先師持本也」

永曆元年(一一六〇)十月十三日書寫了／求法沙門朗龍(以上「金剛界傳法灌頂作法」奥書)

二、經と儀軌における同文的訓読

さて、従来、共時的に宗派流派の訓読語の違いを論ずる場合、現存する同一の典籍の加點言語集團の異なる資料を取り上げ、訓読の様相を、同文的に比較し、その異同を整理することで論ぜられてきた。また、訓読語の通時的な変化、変遷を論じようとする場合も同様の方法が採られ、同一典籍の加點資料を年代を隔てて同文的に比較し、その訓読上の異同を整理して論ぜられるのが一般的であった。稿者も同様の方法を採り、従来、平安後半期の訓点資料は、いわゆる、移点によって成立した資料群であつて、その言語資料の資料性は、前代の訓読語を伝承したもので、言葉としての変化に乏しいものと評価され言語資料として価値の劣るものとされていたのに対して、平安後期・院政期を通じて、変化・変遷の存した事を、金剛界儀軌という儀軌の訓点資料を通時的に比較をし論じたことがある⁽³⁾。

平安時代の訓点資料でも、特に遺存量の多い儀軌類の訓点資料の国語史料としての資料性について解明すべく、個々の儀軌資料を取り上げてきたが、これらの儀軌資料の訓読語が、同一の共時的言語集団内でのどのような性格を持っていたものか、他資料の訓読語との比較によって位置づけおく必要があるものと考えられる。

以下に掲げたものは、儀軌と經との訓読における同文的箇所の訓読の比較例である。

比較例 1

○次(に)復、金剛杵を收取(して)師ハ弟子

於(に)當に恭敬を生ず「當」(再讀)し。此人は能

く諸佛の種を紹ツイツルカ・故(なり)。師授

し。〔円經2 金剛頂瑜伽中略出念誦經卷第四〕

○師ハ弟子に於(て)當に恭敬を生ず「當」(再

讀)し。此人を以(て)能(く)諸佛の種性を

紹(く)か・故(に)師授(く)るに商ハを以

て(す)應(し)。而(して)告(け)て「之」言く。

〔高山寺藏阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌鎌倉初期点〕

比較例 2

○諸の密語の究竟清淨の修行の理趣に於(て)汝

廣(く)衆生の爲に・方便をもて開示(す)應

し善男子諦聽(せよ)。若(し)能(く)

是(の)如(く)・作(ら)者一切の如來皆此

能(の)人は能(く)佛恩を報(し)たてまつる

○諸の密語に於(て)究竟清淨なり。理趣を修行

す。汝廣(く)衆生の爲に・方便して開示(す)

應(し)。善男子諦に聽け。若(し)能(く)是

能(の)如(く)・修(せ)者一切如來皆悉(く)に汝

能(く)佛恩を報(す)と知シロシメぬ。〔同右〕

と知め(す)へし。〔同右〕

比較例 3

○即(ち)所灌頂の者^{ヒト}を引(きて)帝釋方の門より入(りて)蓮花臺の上に坐(せし)め(て)

〔同右〕

○次(に)當に灌頂する所の・者^{ヒト}を引く〔當(再讀)〕(し)。天帝の方門より入(りて)花臺の上に坐す。〔同右〕

〔參考〕又香華種種の供具を以(て)灌頂(す)る所の者^{モノ}に供養す。〔同右〕

比較例 4

○是れを用(て)身を嚴(るか)故(に)諸魔の障を爲す者及(ひ)餘の惡心の類之を觀(て)咸(く)四散しぬ。是の中の密印の相は先(つ)三補吒に作(して)止觀の二風

輪^{アム} 札^{アム}(去)「イ、札^{左、マトヒテ}」火輪の上に持

す。〔円經 4 大毘盧遮那成佛神變加持經卷第五〕

比較例 1・2・3 は、高山寺藏の金剛頂瑜伽中略出念誦經と高山寺藏の阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌兼會初期点とを比較したもの、比較例 4 は、仁和寺藏の大日經と東寺觀智院藏の胎藏儀軌延文三年点との同

○是を用(て)身を嚴(るか)故(に)諸魔障を爲す者、及(ひ)餘の惡心の類之を觀(て)咸(く)四散す。是(の)中の密印の相は先(つ)三補吒を^{アサ}作(して)止觀の二風輪^{アサ}札^{アサ}へて火輪の上に持す。〔東寺觀智院藏胎藏儀

軌(玄法寺儀軌)延文元年点〕

文的箇所と比較をしたものである。

比較例は、いずれも円堂点加点資料であつて、真言宗広沢流の訓読を伝えた資料であると認められるものであるが、比較例1では語序の異同を初め、傍線を付した如く読添語の異同例が存している。比較例2では、語序の異同と傍線部の如き読添語の異同例が存している。比較例3は、字訓の異同例を掲げたもので、「者」字の訓読の相違が指摘される。略出念誦経では「ひと」訓を与えているのに対して、阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌では、付訓がない。必ずしも異同の確例とはなし難い所ではあるが、参考例に引用した如く、阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌では、人に当たる「者」字は、何れも「ひと」訓は認められず、加点がないか、または、「もの」訓の加点が存するかであり、参考例などを参照すると、阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌の「者」字は「もの」訓を与えて読まれたものと解釈されるものである。比較例4は、傍線を付した如く、読添語の異同、「糺」字の訓の異同が認められるものである。

これらの異同は、同一経典の訓読の比較とは異なり、この異同例の出現した背景を解明するのに、種々の複雑な要素を想定する必要がある。示した比較資料は、ともに、平安時代加点の経の訓点資料と鎌倉時代の儀軌の訓点資料であつて、純粹な意味での共時的比較にはならず、通時的な訓読語の変化の結果を含むのかも知れない。また、四資料ともに円堂点資料ではあるが、訓読の出自がそれぞれ同等であると認定するには、奥書の記事等に確たる手がかりが無く、加点者という言語主体の相違に基づいて生成された訓読語の異同を含むものかも知れない。こうした問題の総てを、今即座に解明すべき手だてを持ち合わせてはいないが、比較の両者は、それぞれ、経という訓点資料に属する資料の一部であり、また、一方は、儀軌という訓点資料に属する資料の一部であつて、この資料性の違いも、その可能性の一つであろう。

三、經の訓読における注釈態度と儀軌の訓読における注釈態度

さて、本論は真言宗における経類の訓読語と、儀軌類の訓読語とに相違の存したことを述べようとするものであるが、平安時代の真言宗の訓点資料が多く存する中で、経類と儀軌類の二者の訓読をそれぞれ資料群として特立して取り上げ、比較検討すべき根拠を、まずは示しておきたいと思う。

以下に示したものは、円堂点資料に書き入れられた書入注の具体例である。用例は、本文に対する反切注・義注と本文用字の交合注記とを分かって示したもので、用例中に「」を付したものと付さないものが存するのは、同一資料中の書入注の色の違いを示したものである。

円経1 諸佛境界攝眞實經卷上・中・下

《反切・義注》

「結上二字／不被訓」(「次以結」上欄外・卷一)

乎換反明也謂光明炳一也(「煥」右傍・卷二)

胡減反苦也(「鹹」右傍・卷三)

力古鹹汁也(「鹵」右傍・卷三)

《交合注記》

「得イ」(上欄外補入・卷一)

指イ(「相」左傍・卷二)

業(上欄外補入・卷二)

褥(「褥」右傍・卷三)

珠(「殊」左傍・卷三)

許或(「計」陀羅尼上欄外・卷三)

円経2 金剛頂瑜伽中略出念誦經卷第一―四

《反切・義注》

《交合注記》

- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 怕（「爲」反／恐也）（「怕」左傍・卷一）
- 由也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 古患反習也遺也慣也（「串」右傍・卷一）
- 被也（「爲」右傍・卷一）
- 已也（「以」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 猗京反／花也飾／也茂也（「英」上欄外・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 以也（「爲」右傍・卷一）
- 所□反（「筭」上欄外・卷二）
- 以也（「爲」右傍・卷二）
- 切也（「揮」下欄外・卷二）
- 以也（「爲」右傍・卷二）

- 巧或（「秘」上欄外・卷一）
- 我或（「皆」下欄外・卷一）
- 若准儀軌／可爲肩字（「推」右傍・卷一）
- 止或本（「陀」左傍・卷一）
- 「你勃陀或本」（陀羅尼上欄外補入・卷一）
- 雷電（「雲蔭」右傍・卷一）
- 「輪陀或」（陀羅尼上欄外補入・卷一）
- 「輪陀或」（陀羅尼上欄外補入・卷一）
- 「室者或」（陀羅尼上欄外補入・卷一）
- 合或（「含」下欄外・卷一）
- 「誦欺」（「語」右傍・卷一）
- 「蕪羅多薩埵鏝或本」（「三摩耶護」陀羅尼下欄外・卷一）
- 即イ（「既」左傍・卷一）
- 或本（「地」見消右傍・卷一）
- 説イ（上欄外補入・卷一）
- 上イ（下欄外補入・卷一）
- 「乞叉拏或」（「瑟那」右傍・卷二）
- 正作ハ／鞘力（「筭」下欄外・卷二）

「施也」(「嘍」右傍・卷四)

七人反／至也／道也(「嘍」下欄外・卷四)

於龍反比也(「翳」右傍・卷四)

「普半／反合也」(「牀」上欄外・卷四)

抽イ(「招」右傍・卷三)

梵本无阿字同下(「阿」陀羅尼左傍・卷四)

迦(「伽」朱訂・卷四)

「施イ」(「故」上欄外・卷四)

「堅イ」(「豎」上欄外・卷四)

「以福智或本」(「福莊」上欄外・卷四)

円儀 2 佛說七俱 佛母准泥大明陀羅尼念誦法門

《交合注記》

施イ(「張」上欄外)

无邊イ(「遍」下欄外)

イ本(「定」見消)

地(上欄外補入)

你(陀羅尼左傍補入)

或本(「王」見消)

或本(「有」見消)

契(上欄外補入)

指或(「相」下欄外)

「觀或」(「說」右傍)

互或(「別」上欄外)

「文字皆是无」(「文字」右傍)

觀或(上欄外補入)

遍或(「通」上欄外)

莎(陀羅尼右傍補入)

布或(「喃」下欄外)

界(下欄外補入)

通或(「道」右傍)

漢或(「語」上欄外補入)

經／或本(右傍補入)

円儀 4 金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌

《反切・義注》

智也（「奢摩他」右傍）
定也（「毘婆舍那」右傍）

仁或（「人」上欄外）

《交合注記》

円儀 9 聖不動尊安鎮家國等法

《反切・義注》

多交反□也（「凍」左傍）
薄半反奔也（「叛」左傍）
濁也（「渾」右傍）
入也（「容」右傍）
胡也（「審」右傍）
作早反黑也（「皂」左傍）
ケフリ也（「慘」左傍）
□所也（「在」上欄外）

輪イ（「輻」上欄外）

《交合注記》

看（「看」右傍）

以下八方夫／真言漢字／自本无之／但後或

人／書之 云々（陀羅尼上欄外）

121 「12a」陀羅尼上欄外）

122 右（陀羅尼上欄外）

或本 121 字下有發願／注（陀羅尼末尾）

諸佛境界攝眞實經には、反切・義注四条と交合注記六条とが認められる。反切・義注の項目の初掲例は、厳密な意味での反切・義注に当たらないが、おそらく、伝授等の場における本文の訓読についての注記で、ここに分類して掲げた。以下の三例は、本文の用字に対する反切注と義注とを記した

ものである。

金剛頂瑜伽中略出念誦經には、資料に示した如く、漢文本文「爲」字に対する「以也」の注記を初め、片仮名注を含めて、四十二条の反切や義注の書入が存する。交合注記も四十三条を数える。

一方、儀軌資料では、佛説七俱胆佛母准泥大明陀羅尼念誦法門には、反切・義注の書入注は存在せず、本文の交合注記が存するのみである。

金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌には、義注が二条、交合注記が一条存するが、義注の二条は、いづれも、漢文本文中に存する音訳梵語「奢摩他」「毘婆舍那」に対する注記であって、先に示した経の反切・義注が漢文正文の漢字の用字に対するものであったのとは性格を異にしている。

聖不動尊安鎮家國等法の書入の状況は、経の書入に近い状況を示したものであるが、反切・義注の初掲例、本文「凍」字に対する「多交反□也」を初めとして、八条の反切・義注の書入が存する。交合注記も陀羅尼の梵字を含めて六条を認める。

これらの書入注の様相を集計したものが、表1である。本稿に取り上げた総ての資料に亘って集計したのではないが、円堂点資料の書入注を整理したものである。対象の資料の言語量の多寡の問題も存するが、それぞれの資料について、円堂点資料においては、経類とした三資料に反切・義注が、それぞれ四例・四十二例・二例出現するのに対して、儀軌次第類には、交合注記が各資料に存する割には、反切・義注が存しないか、または、存しても書入が多くはない。この中で、円儀8とした不動安鎮法が例外的で、他の儀軌類と様相を異にするが、当該資料の個別の問題として精査の必要があろう。

一般に、経類においては、漢文本文の用字に対する反切注・義注の書入が盛んであると認められよう。これに比較して、儀軌類の場合、反切・義注の書入が少なく、しかも、その反切・義注も漢文本文

〈表1〉 經・儀軌の書入注

資料番号・資料名	反切注・義注	校合注記
經類		
円經1 諸佛境界攝眞實經卷上・中・下	4	6
円經2 金剛頂瑜伽中略出念誦經卷第一—四	4 2	4 3
円經3 使咒法經	2	5
儀軌・次第類		
円儀1 毘盧遮那佛說金剛頂經光明眞言儀軌	0	3
円儀2 佛說七俱 佛母准泥大明陀羅尼念誦法門	0	2 0
円儀3 降伏三世忿怒王念誦儀軌	0	0
円儀4 金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌	2	1
円儀5 大虚空藏菩薩念誦法	0	2
円儀6 慈氏菩薩略修愈 法卷上	0	7
円儀7 金剛壽命陀羅尼經法	0	2
円儀8 聖不動尊安鎮家國等法	8	6
円儀9 北斗七星護摩秘要儀軌	1 (卷末)	3
円儀10 觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	1	4
円儀12 金剛頂一字頂輪王瑜伽念誦次第	0	5

中の音訳梵語に対するもの、または、陀羅尼の用字に対するものなど、經類の状況とは異なつた様相を指摘できそうである。

表中には、經類として、大日經疏の如き經釋書の類、胎藏念誦次第などの次第の類も取り上げたが、前者の經釋類は、經と、後者の次第類は、儀軌と同様の書入注の状況を示すと認められるものであつて、これらそれぞれを今、經類、儀軌類に含めて考えることとする。

右に確認した經類と儀軌類との書入注の様相は、東大寺点資料、中院僧正点資料についても同様の状況であつて、眞言宗の訓点資料全体に通じる傾向であるように考えられる。

こうした書入注の相違は、特に、反切・義注の類が、訓読と連動したものであつた事を考えれば、經類の訓読と儀軌

類の訓読との訓読の質の違いを想定させるものであろう。

四、經の訓読と儀軌の訓読における読添語の様相

以上の書入注の検討から、以下には、訓点資料を経類と儀軌類とに分けて、その訓読語の異同を問題とする。

先掲の比較例1から4の同文的比較例の検討で種々段階での訓読の異同が出現していることを示したが、そのうち、語序（語順）の問題は、漢文自体の解釈・理解の問題であつて、必ずしも、言語特性を考える手がかりとは為し難い場合が多い。また、字訓の問題は、ある限られた範囲、特定の事象において、言語の質を論じることが出来るものと認められるが、ある資料に出現する全字訓の用例を採取しての字訓総体の整理が、訓読語の質の違いを指し示す事は、多くの場合あまり期待されないと考えられる。字訓の出現は、既に存する漢文の本文の用字を如何に訓読するかの場合であつて、すでに、漢文の用字の制約が存する事を考えなければならぬと思われる。こうした原漢文の表現に比較的制約を受けないのは、この中で読添語であろうと考えられる。

訓点資料における漢文訓読語は、いわゆる、自由な日本語表現ではないと考えられる。すなわち、既存のものとして既に漢文が存しており、これを理解し、漢文の字面に従つて言語表現を行う場合に現れる言語である。語序の異同や字訓の異同は、言語表現において原漢文の制約を受けやすいものと認められる。読添語としてその例外ではないが、語序や字訓の問題に比較すれば、比較的自由的な言語表現の可能な部分に属するものであると考えられる。

以下、読添語を取り上げて、經の訓読と儀軌の訓読とを検討する。次に掲げる表2は、円堂点資料、

東大寺点資料の経類と儀軌類との読添語を集計したものである。

この整理に当たっては、各資料について、必ずしも、一通りの訓読の結果が加点されている訳では無く、同一箇所にも複数の訓読の結果を記した部分が存するが、これについて、基本的には、右傍の訓など主要の訓読と認められた一通りの訓読に従って用例を収集した。また、後筆・別筆と認められるものは、これを除外した。

読添語の収集に当たっては、各資料に類出する「を」「に」「と」・「をもて」等の格助詞類、「て」「とも」「ども」等の接続助詞、係助詞「は」、いわゆる指定の助動詞「なり」「たり」、形式体言「こと」を除外してある。

対照表は、左から整理の略号と書名と、言語量の目安として各資料の行数を示し、以下、右の欄には助詞・助動詞・動詞・名詞・その他接続詞及び連語の順に、各資料に出現する用例数を示したもので、右末尾の欄は、各資料に出現した読添語の異なり語数を記したものである。又、各資料群の資料の配列は、上段に経類を配し、その内部は、経と経釋書に分ち、それぞれを年代順に配列した。下段の儀軌類は、同様に、儀軌と次第とに分ち、それぞれを年代順に配列した。

この表全体の示す傾向を、円堂点資料の集計結果を基に、述べてみたいと思う。表中、第二段目の資料分類の項目の右側に記した○は、用例数の多寡を無視して、各語詞が、類中に出現する場合に記したもので、その総数は、異なり語数欄に掲げたものである。なお、円堂点資料の経類の読添語の異なり総数は、三十語である。儀軌類についても同様に示したが、儀軌・次第に出現する読添語は、二十三語を数える。一般に、経類において読添語の多様な様相が見て取れる。東大寺点資料においても同様の傾向を示して、経類三十八語、儀軌類二十八語が確認される。

き	つ	ぬ	たり	り	べし	ごとし	たまふ	たてまつる	あり	います	いふ	おもふ	す	なる	のたまふ	まうす	とき	ひと	もの	まれ	といは	異なり語数
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	30
3	10	14	8	19	10		30	11	2	4	1		○	○			○					18
	4	17	16	52	49	2	58	15	26	1	2	1	3	2			6		2			26
			1	1			1	1	2										1			9
5	4	9	11	81	14		61	5	24		2	2	6				1		2			23
9	16	40	19	73	8		17	1	7		61	2	3	1			23		1	2		28
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○			○				23
2			1	1			4															6
		4		5	1		2	1									2					10
	3			2			1		1					1			1					8
		13	6	28	17		17	5	5		1		3				1	6				17
	1	1		1	1		1		1													8
		1		10			2	5	1													11
	2	5	1	2	2		7	1		1					2							13
1		1	2	10	6	1	1		9				2				1					15
																						1
	1			18	2	2	11	3	4													9
		1			1		3		1			1					1					8
		1	3	6					3													5
		1	3	1			5		3					1	2							11

き	つ	ぬ	たり	り	べし	ごとし	たまふ	たてまつる	あり	います	いふ	おもふ	す	なる	のたまふ	まうす	とき	ひと	もの	まれ	といは	異なり語数
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	38
1	8	11	10	38	35	1	26	3	7		1	2	31	1			8	2		2		27
1	1	2	2	2		1	6					1					3					14
2	13	26	5	19	33		7		9	1	8	1	10	1			33	2	1	6		29
12	3		4	12			13	4			3	4							1			14
1	1	6	8	9	12		7		3		3	2	1		1		12					21
		3	1	7			2					2					4					11
4	4	21	21	32	9	2	81	4	8	1	40			1			52			2		26
12	9	18	22	30	4		47	4	7		34		5	3	1		10			1		24
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	28
1		7	6	16	35	2	16	20	5			8				1	1					17
		1	14	99			11	5	114	1		10					4					15
2		1	10	56	2	4	8		56	2	1	13					2					16
1		3	4	4	4	2	6	2	4					3						2		14
	1		1	9			2		1			5										7
	1	1	16	33	2		7	7	40			2	5									12
		1		2	3							8										7
		2	2	5			4	1														7
		1	1	2			3															9

*2「金明頂蓮華部心念誦儀軌」には、上記表中の敬添語以外に、助動詞「けむ」一例が存する。
 *4「大毘盧遮那経広大成就儀軌卷上（玄法寺儀軌）」には、上記表中の敬添語以外に、動詞「まします」一例が存する。

〈表2〉 続添削対照表
 〈平基点資料添削表〉

資料番号・資料名	も	ぞ	や	か	だに	すら	のみ	まで	し	い	がら	かな	る	しむ	む
経類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
円経1諸佛境界攝真實經卷上・中・下 (1263行)	17		2	14				2					4	2	32
円経2金剛頂瑜伽中略出念誦經卷第一一四 (2966行)	12	1	4	2			1	1	1(?)	1				37	124
円経3使陀法經 (72行)	4													1	31
円経4大毘盧遮那成佛持變加持經卷第一 (525行)	18	17	1	19			3	2					3	2	23
円経5大毘盧遮那成仏經疏 (987行)	104	3	8	21		2	15	2		6	1		2	2	61
儀軌・次第類	○		○				○	○						○	○
円儀1毘盧遮那佛說金剛頂經光明真言儀軌 (130行)														2	17
円儀2佛說七俱胝佛母准提大明陀羅尼念誦法門 (343行)	1							1						4	12
円儀3降伏三世忿怒王念誦儀軌 (82行)														3	26
円儀4金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌(381行)	10		1					1						3	7
円儀5大虚空藏菩薩念誦法 (137行)														1	7
円儀6燕氏菩薩略修念誦法卷上 (389行)	5							1	3				1	1	6
円儀7金剛壽命陀羅尼經法 (139行)	4												1	4	17
円儀8聖不動尊安鎮家園等法 (292行)	4						1	1						15	50
円儀9北斗七星護摩秘要儀軌 (64行)														2	
円儀10觀自在如意輪菩薩念誦法要 (181行)	2														4
円儀11降三世儀軌 (95行)														4	19
円儀12金剛頂一字頂輪王瑜伽念誦次第 (277行)	4														
円儀13金剛界次第 (764行)	2												1	2	2

注、「たまふ」には、四段・下二段の用例を含む。

〈東大寺点資料添削表〉

資料番号・資料名	も	ぞ	や	か	だに	すら	のみ	まで	し	い	がら	かな	る	しむ	む
経類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
東経1薩摩呼童子請問經 (1504行) *1	18	22	8	7			8							1	15
東経2大乘理趣六波羅蜜經 (序文部分のみ) (37行)			1				2							1	2
東経3薩摩地羯羅經卷中 (501行)	24	1	3	1		2	3	2		2		1	1	1	99
東経4不空稱宗神咒心經 (313行)	3		1	1									3		75
東経5薩摩呼童子請問經卷上 (439行)	14	11	8	4		1	1							2	33
東経6略出念誦經卷第三 (436行)	3	1		4										2	15
東経7大毘盧遮那成仏經疏卷第十四 (793行)	23	18	2	6	1		9	16	1	1				6	35
東経8大毘盧遮那成仏經疏卷第三 (855行)	30	4	15	13				11	3			1	3		62
儀軌・次第類	○		○	○										○	○
東儀1金剛頂蓮華部心念誦儀軌 (558行) *2	7			1											15
東儀2大毘盧遮那經広大成就儀軌 (玄法寺儀軌) (1063行) *3	4							1							13
東儀3胎藏儀軌卷中 (背籠寺儀軌) (569行)					1			1							7
東儀4金剛頂蓮華部心念誦儀軌 (1010行)					2										8
東儀5火伴供養儀軌 (336行)															5
東儀6大毘盧遮那經広大成就儀軌卷上 (玄法寺儀軌) (644行)	1														7
東儀7金剛頂瑜伽降三世成就極深密門 (90行) *4															2
東儀8金剛界略次第 (604行)															4
東儀9傳法灌頂作法 (697行)			4	2				1							4

注、*1「薩摩呼童子請問經」には、上記表中の続添削語以外に、助動詞「ず」一例、動詞「みる」二例の例が存在する。
 *3「大毘盧遮那經広大成就儀軌(玄法寺儀軌)」には、上記表中の続添削語以外に、動詞「かく」「みる」各一例が存在する。
 〈以上の例は、表中の異なり語数欄に加算してある〉

円堂点資料の資料個別の読添語の異なり語数も、経類に読添語の多様な様相が見て取れる。経類では円経3使咒法経を除いて十八語以上である。儀軌類では十七語を上回るものはない。ただ、円経3使咒法経が例外的で、経類中では異なり九語と出現読添語数が少なく、他の経類に比較して異なり語数が極めて少ない。この問題について少し触れておきたい。使咒法経は、七十二行を数える資料で、他の経類に比較して、決して言語量が多いものではない。他の、儀軌類についても、言語量の少ない資料については、比較的読添語の異なり語数が少なく出現するようであり、言語量の多寡の問題を全く無視する訳には行かないと考えられるが、たとえば、東大寺点資料中の東経2とした大乘理趣六波羅密経は序の部分のみの集計であるが、三十七行ほどの資料であり、異なり十四語の出現が認められる。逆に、儀軌・次第類の資料は、経類に匹敵する言語量を有する資料においてさえ各資料二十語を上回る事はない。特に、儀軌類において言語量の増加とともに読添語の異なり語数が正比例的に増加する訳ではないようである。異なり語数の面からの全体的傾向は、やはり、経類において読添語の多様さ、訓読語の表現の幅の広さが伺えるものと考えられる。

以上に述べたような傾向を支えているものを、読添語の語詞分類に従って検討を加える。経の読添語と儀軌の読添語とを比較したとき、少なくとも本稿の調査の限りの円堂点資料においては、儀軌・次第類に出現する読添語は、「のたまふ」「ひと」「二語を除いて、経に出現している。

まず、経類の読添語と儀軌類の読添語とを比較したとき、経に偏る読添語を表2から確認をしておきたいと思う。助詞の欄は、円堂点の経類の特有語は「ぞ」「か」「すら」「い」「ながら」の五語であるが、経類、儀軌・次第類ともに出現する助詞も一般に儀軌類において、頻度が低いと認められる。東大寺点資料においても顕著で、「ぞ」「だに」「すら」「のみ」「し」「い」「ながら」「かな」は経

類の特有語である。東大寺点資料においても、儀軌において出現しないか、または、用例が少ない語詞が目立つ。ここに掲げた助詞は、用例採取の整理・集計の際、格助詞・接続助詞類を除外したもので、係助詞、副助詞、又は間投助詞、終助詞で、これらの助詞が経類において多用されている事を確認しておく。

助動詞の欄では、円堂点の経類に特有の助動詞は、「ごとし」の一語である。東大寺点資料での助動詞は、経類特有語は「る・らる」一語で、他は経類、儀軌類ともに出現を認められるが、助動詞「き」については、儀軌類の用例が比較的少ないと認められる。

動詞や名詞、連語の読添えは、円堂点の経類において「います」「おもふ」「もの」「まれ」などが、逆に、儀軌類では「のたまふ」「ひと」などの特有語が存する。東大寺点資料では、経類に「のたまふ」「ひと」「もの」「といは」が、儀軌類では「まうす」が特有語として存している。資料群によってそれぞれ語詞の出入りが存するものの、一般に、儀軌類における動詞や名詞、連語の読添語の出現頻度は、経類に比較して高くはないものと認められよう。

以上から、経類の訓読語と儀軌・次第類の訓読語との間には、経類の訓読における助詞類の多用、助動詞の内一部の助動詞の使用や助動詞「き」の経類における多用、動詞・名詞など自立語の経類における読添語の出現状況の多様さが、その相違として指摘されよう。

五、経と儀軌との漢文体の相違と読添語の量的相違との相関関係

以上に述べた経類の訓読と儀軌類の訓読とにおけるかかる読添語の相違は、どのような背景を持つものであろうか。

以下の例は、円堂点資料の内、経4に当たる大毘盧遮那成佛神變加持經卷第一の内題等を除いた冒頭の部分を示したものである。

○是(の)如(く)・我れ聞(き)き。一時薄伽梵、如來加持廣大金剛法界宮に住(し)たまふ。一切の持金剛(は)「者」皆(悉(く)集會せり。如來の信解遊戯神變より生せる大樓閣寶王は高(く)して無中邊(なり)。諸の大妙寶王をもて種種に間飾せり。菩薩(の)「之」身を師子の座と爲り。其(の)金剛は名(け)て虚空無垢執金剛《中略》金剛手秘密主と曰(ひ)き。是(の)如(く)・上首の十佛刹微塵數等持金剛衆と俱なりき。(円経4 大毘盧遮那成佛神變加持經卷

第一 三行(十五行)

と始まるものである。続いて、二十九行以降は、次に掲げた如く、

○尔の時に執金剛秘密主、彼の衆會の中に於(て)坐して佛に白(して)言(く)。「世尊、云何(に)してか如來應供正遍知の一切智智を得(たま)ヒシ。彼れ一切智智を得(て)無量衆生の爲に廣演し分布(して)種種の趣、種種の性欲に隨(ひて)種種の方便道をもて一切智智を宣説(し)たまふ。或(は)聲聞乘の道、或(は)緣覺乘の道、或(は)大乘の道、或(は)五通智の道、或(は)願(はく)は天に生れ・或(は)人中及(ひ)龍夜叉乾闥婆・乃至摩睺羅伽に生(る)る。法を説たまふ。《中略》世尊、喩(へ)は水界の一切衆生、之に依(りて)欲樂するか如(く)・是(の)如(く)・一切智智も諸天世人の利樂を爲(した)まふ。世尊・是(の)如(き)・知慧、何を以(て)か・因と爲(る)・云何(なる)をか根と爲(る)・云何(なる)をか究竟する。」是(の)如(く)・説き已(り)ぬ。毘盧遮那佛、持金剛秘密主に告(けて)言(はく)。「善哉善哉執金剛善哉金剛手、汝、吾に是(の)如(き)・義を問へり。汝、當に諦に聽(き)て善く作意す

「當」(再讀)し。吾今之を説む。」金剛手の言サク。「是(の)如(く)・世尊願^ネ樂^カクは聞(かむ)と欲ふ。」佛の言^(のたま)(は)ク、「菩提心を因と爲・悲を根本と爲・方便を究竟と爲。秘密主、云何(なる)か菩提、謂(く)、實の如(く)・自心を知(る)そ。秘密主、是(れ)阿耨多羅三藐三菩提は乃至彼(の)法は少分も得可(き)こと有(る)こと無(し)。何(を)以(て)の故に、虚空の相、是れ菩提なり。知解する者^(もの)無(く)・亦開一曉するモノ無(し)。何(を)以(て)の故に、故(に)、菩提は無相(なる)か故(に)。秘密主、諸法は無相なり。謂(く)、虚空の相ぞ。」(同右 二十九行〜五十七行)

の如く、本文が展開する。例に、引用した大日経に限らず、経が仏説の形式で文章全体が作られ、問答の形式で展開されていることを先ず、確認しておく。

以下は、儀軌・次第の訓読の様相を示したもので、円儀3降伏三世忿怒王念誦儀軌の冒頭部である。

○尔(の)時に諸佛菩薩一切賢聖、世間(に)現(して)一切有情を利益(す)。時に正法に順(ふ)こと非ずして國土の衆生を損壊(する)・魔等の爲に・阿閼、普賢・大弘誓・甚(た)深(き)か故(に)忿怒の形相(を)示現(して)佛白(して)言(く)、「我、眞言を在(テリ)世間に於(て)甚(た)希有なる所なり。諸の如來、眞言を宣説せむことを聽サ被(レ)ヨ。我等當に諸佛の教法(を)守護(して)一切有情(を)饒益す「當」(再讀)し。」尔(の)時(に)佛告(け)て言(は)く、「善哉善哉、忿怒王・汝、降伏の眞言を説(く)ことを聽す。」則の時に四面八臂極黒大威怒(の)形相を示(現)して眞言の句頌を説(く)。眞言(に)曰(く)「一オ三行一ウ三行」

〔参考〕尔の時に・諸佛菩薩一切賢聖、世間に現しぬ、一切有情を利益(し)たまふ。時に正法

に順（ふ）こと非ずし（て）國土の衆生を損壞する・魔等の爲に・阿闍、普賢・大弘誓・甚深なるか故（に）忿怒の形相（を）示現（して）白（して）言く、「我れ、眞言を在（クモ）テリ。「於」世間に甚（た）希有なる所なり。諸の如來・眞言を宣説せむことを聽（ユル）サレ被よ。我等・當に諸佛の教法（を）守一護し（て）一切有情（を）饒益せむ。」尔（の）時（に）・告（けて）言（はく）、「善哉善哉、忿怒王・汝、降伏の眞言を説（か）むことを聽す。」則の時に四面八臂極黒大威怒の形相を示一現し（て）眞言の句頌を説く。眞言（に）曰（く）

（東寺觀智院藏降三世儀軌嘉承三年点 一オ三行一ウ七行）

とある。なお、参考に掲げたものは東寺觀智院藏降三世儀軌嘉承三年点の同一箇所である。

この資料の冒頭部は、本儀軌が忿怒王の所説であることを示したもので、会話部分も存するが、当該資料の大半は、

○若（し）此の眞言を修せむと欲（は）は・「者」面、東にして像の前にして威怒し噴（イカ）テ我（か）身、則（ち）本尊威怒王に異（ら）不と想へ、則（ち）三業の所に卍字三遍を誦せよ。亦、法界に安ケ。則（ち）二手堅固縛して額の上に捧（けて）左右に三ひ轉せよ。亦、避除法界と成（る）。

次（に）心（を）至（して）合掌して威怒尊諸聖衆を礼拝せよ。（二ウ七行一三オ四行）

〈参考〉若（し）此の眞言を修せむと欲（は）は・「者」面を東（に）して像の前にして威怒し噴（イカ）テ我か身、則（ち）本尊威怒王に異（ら）不と想へ、則（ち）三業の所に・卍字三遍を誦（せ）よ。亦、法界に安ケ。則（ち）二手堅固縛して額の上に捧（けて）左右に三（ひ）轉（せ）よ。亦、避除法界と成（る）。次（に）心を至（して）威怒尊諸聖衆を

合掌礼拝（せ）よ。（東寺観智院藏降三世儀軌嘉承三年点 三ウ三行〜四オ四行）

とある如く、観法、真言の念誦法、印の結び方などなどの修法を記したもので、こうした部分が資料の大半を占める。

次に掲げたものは、東大寺点資料の内、東儀1金剛頂蓮華部心念誦儀軌の一部であるが、

○二羽金剛縛にして 忍一願堅てむこと針（の）如（く）せよ。纒ワツカに眞言を誦し・已（る）ときに

自一身、普賢と成（りて） 「於」月輪の上（に）坐しぬ。身の前に普賢を觀せよ。眞言（に）曰

（く）
（八十四行〜八十五行）

とあって、印契法と觀法とを記したものであるが、この資料も同様に、かかる金剛界法の修法を記した部分が主となっている。

次は次第の例で、円儀13金剛界次第（益信次第）を内題部分から掲げたが、本文の冒頭は、いきなり作法の記述に始まる。

○金剛界次第

先（つ）房舎に於（て）手（を）洗（ひ）・作法（し）了（れ）。堂（の）「之」間（に）至（り）・金剛薩埵（を）想（へ）。寶冠を頂戴（し）・手（に）五胡を取「レ」・右（に）五胡を取（りて）
胸「ムネ」に當て・左の手（に）鈴を取（りて）腰「コシ」に安「セヨ」。足、蓮花を踏ム（て）堂場に趣一
向「セヨ」・堂の戸「トホ」に至「ル」・時、無能勝定に入（りて）三度彈指（せ）よ。左右の手、拳
に作（して）左は腰に（せ）よ。右、頭指を申へテ短の卍字を誦（して）結界（せよ）。印をもて
十方の五處を指（せ）よ。
次（に）堂の戸を開（けて）入れ

次(に)壇(の)「之」許に至(りて) 踟蹰合掌して普礼眞言を誦(せ)よ。普印 (冒頭一行ノ八行)の如くである。以下には、金剛界法の作法が記される。

これらの経や儀軌・作法の、文章の展開は、訓読語が表現される以前の原漢文の展開に依るもので、原漢文の制約の上に存している文章の展開である。

さて、経類の訓読において、儀軌類と異なった読添語の問題を、この各資料の持つ文章構成の問題と関係して検討する。経類の読添語の特徴の内には、助詞類の多用、助動詞の内一部の助動詞の使用、助動詞「き」の経類における多用が指摘された。経類に多用の助詞に「ぞ」「や」「か」などが存するが、これらの助詞は、疑問表現や反語表現を支える助詞で、右に確認した文章の性質上、すなわち、原漢文の制約上、経類に多く出現するのは、経が問答体の形式を採っていることに起因するところが大きいのではなからうか。用例数が限られているが、終助詞の「かな」も或いは同様の解釈を施すことが出来る。助動詞「き」の経類における多用も、同じく原漢文との問題で把えることが出来るように思われる。過去の時制で表現すべき箇所は、経において多く、儀軌・次第は、そもそも、この要件に当たらないもの、助動詞「き」を読み添えることが期待できる箇所そのものが原漢文中に少ない。

経類の読添語が多様であることは、それ自体、経の訓読語と儀軌の訓読語の違いを示すことになろうが、経類と儀軌・次第類との読添語の傾向性の内、以上の如き異同は、経の訓読語、儀軌の漢文訓読語そのものが質的に異なる事によって出現したものではなく、いわば、量的な相違に繋がるものと把えておきたい。すなわち、訓読語の発現において、既に、原漢文から何らかの形で表現が制約されたものであると認めておきたい。

六、經の訓読語と儀軌の訓読語の質的相違

右には、經の訓読語と儀軌の訓読語における、量的相違と考えられるものを問題としたが、質的な相違は存するものであるうか。

①、助詞「い」

〈円堂点資料〉

○既(に) 人功を須(て) 之を發(音) (する) いは・即(ち) 是縁に従(ひ) たり・自然の有には非(す) 「也」。(円經5 大毘盧遮那成仏經疏卷第二)

〈東大寺点資料〉

○彼(い) 然も 諾(ウヘナ) ヒ已(り) ナハ後に當に之を與へ(よ)。(東經3 蕪悉地羯羅經卷中)

○彼(い) 能く壞し「及以」輕蔑(する) こと無(ら)む。(東經3 蕪悉地羯羅經卷中)

○諸明・即(ち) 其(の) 體(を) 以(て) 自然に身に有(る) いは表する所・密印に非(す) といふこと無(し)。(東經7 大毘盧遮那成仏經疏卷第十四)

右の用例は、副助詞、又は、間投助詞と言われる助詞「い」の用例である。表2の助詞の項目の中にも用例数を掲げたものである。用例数は多くを数えないが、この語は、經類のみ出現する。この語は、古代の助詞とも称される如く、平安中期以前の訓点資料には一般にその用例が多く、以降の訓点資料には、その例が限られると説かれてきた助詞で、この助詞の出現は、經類の訓読に偏る。中院僧正点資料(5)の中には

○普賢と金剛初となり、そゑに我、金剛手を礼す。

(高山寺藏金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經卷三)

の如き接続詞「そゑに」が出現する。この語の読添えも平安中期以前に盛んで、以降の訓点資料には稀になると説かれるものである。これらは円堂点資料・東大寺点資料・中院僧正点資料という資料群の別無く調査の限りでは儀軌類には出現しない。

②、「者」字の訓

〈円堂点資料〉

○能く教^レ授する者^トなり。(円經5 大毘盧遮那成仏經疏卷第二)

〈東大寺点資料〉

○是(の)如(く)・一輪より字輪を轉輪する、持誦する者^ト(を)知(る)へし。

(東經7 大毘盧遮那成仏經疏卷第十四)

○久く眞明(の)「之」行を習(して)傳誦するに堪(へ)たる者^トノ方^トに意(を)以(て)相ひ傳(ふる)に非(ざる)自(り)は・文を以(て)載(する)可(から)不(す)。

(東經7 大毘盧遮那成仏經疏卷第十四)

○瑜伽を修行せむ者^ト是(の)如(き)・心(を)發(す)應(し)(東儀1 金剛頂蓮華部心念誦儀軌)

○般無餘涅槃に臨(み)たまへる者^トは(東儀1 金剛頂蓮華部心念誦儀軌)

②として掲げた用例は、読添語の用例ではなく、字訓の問題である。「者」字の訓読の問題で、「ひと」訓を与えた例を列挙した。この「ひと」訓を与える訓法は、平安中期以前の訓点資料において出現するもので、平安中期を境に、一般的には、即字的な「もの」訓に変化するものと説かれる。この訓読は、用例に示した如く各資料群の経類の訓読に出現する。儀軌・次第類には円堂点資料では、本稿の調

査の限りではこの「ひと」訓の確例がない。ただ、真言宗小野流の東大寺点資料群においては、用例に示した如く、儀軌の中に確例が認められる。

以上は、経類の訓読語が、古語的性情を示したものとして把える事が出来るものと考えられるが、かかる訓読の出現は、必ずしも原漢文の制約上に出現したものとは認められず、経の訓読語と儀軌の訓読語とが質的に異なる性情を示したものと認められよう。ただし、東大寺点資料においては、儀軌類にも経的訓読が出現している。この現象は、東大寺点資料の儀軌類の訓読の質に関わる問題で、東大寺点資料における儀軌の訓読が、他の資料群の訓読に比較して、経に傾いているものと解釈出来るのではなからうか。

おわりに

さて、以上、述べてきた如く経類の訓読と儀軌類の訓読とは量的・質的相違が存するものと認められ、また、各資料群、即ち、真言宗広沢流の円堂点資料、真言宗小野流の東大寺点資料における経類の訓読語と儀軌類の訓読語との相違の様相は、各言語集団の違いによってその様相を異にしていたと認められるように考えられるのであるが、多くの問題を残した。今後、更なる用例の収集整理によってその実証性を高めたいが、共時的に俯瞰することを一義的においたため、一般論からの例外の処理についての言及を充分には行っていない。また、資料的制約が存するものの、共時態の設定そのものが平安後半期、平安後期・院政期と言う括がりを持ち、その設定した共時態そのものが通時期的変化を含んでいる可能性も考えておく必要があるものと考えられる。また、経の訓読語や儀軌の訓読語の生成は、多分に通時的な背景が存するものと予測されるが、これらの問題については、今後の課題とする。

注

- (1) 築島裕「成唯識論の古訓法について」(『国語と国文学』四十六卷十号、昭和四十四年十月)
 築島裕「平安時代の古訓点の語彙の性格―大日経の古訓点を例として―」(『国語学』八十七輯、昭和四十六年十二月)
- 月)
- 築島裕「大日経疏の古訓法について」(『五味智英先生古稀記念上代文学論叢』昭和五十二年十一月)
- 三保忠夫「蘇悉地羯羅經古点の訓読法」(『国語学』百二輯、昭和五十年九月)
- 小林芳規「仁和寺尊藏金剛頂瑜伽護摩儀軌二本の訓点―金剛頂瑜伽護摩儀軌の訓読史よりの考察―」(『訓点語と訓点資料』第八十八輯春日和男博士喜寿記念特輯号、平成四年三月)
- (2) 月本雅幸「大唐西域記の古訓法について」(『国語と国文学』五十七卷十二号、昭和五十五年十二月)
 月本雅幸「不動儀軌の古訓点について」(『築島裕博士国語学論集』昭和六十一年三月)
築島裕博士
 還暦記念
- (3) 拙稿「真言宗小野流における金剛界儀軌の訓読」(『国文学攷』第一三二・一三三合併号、平成四年三月)
- (4) 拙稿「経の訓読と儀軌の訓読―中院僧正点資料を中心として―」(『築島裕博士国語学論集』平成七年十一月)
古稀記念
- (5) 注4文献